

八潮南保育園

テーマ 「虫」

本園は品川区の南側、海（運河）にほど近い場所にある。周辺には豊かな自然環境があり、園庭では様々な生き物や植物など、常に自然に触れることができる環境である。園庭では、常に「虫探し」を楽しみながら、虫の種類や飼育方法を調べるなど、興味・関心がある。虫にかかわりながら探究心を育て、更に興味・関心を広げ豊かな心の育成を目指す。

活動「虫を作ってみよう」 4 歳児

活動のねらい

虫・花などをイメージしながら、自分なりの方法で制作して表現する



活動内容

・教材や材料を選び、折ったり切ったり貼ったりして虫や花を作る。

用意した環境

○虫かご・図鑑・折り紙の本・折り紙・ペットボトルキャップ・色画用紙・ハサミ・サインペン



子ども達の様子

夏の間、虫かごを持って園庭や公園で虫探しをしたが、虫が捕まらなかった。自分の虫かごに虫を作って入れてみよう、と、保育者が提案した。折り紙の本を見ながらチョウチョやカブトムシ、クワガタなどを作って虫かごに入れた。好きな虫が入ったことを喜んでいて、出来上がると、初めは眺めて嬉しそうであったが、友達の制作を見ているうちに、葉や虫のエサ入れなどを作って虫かごに足していた。本物の虫を見るかのように、虫眼鏡でじっくり見て観察する姿もあった。

保育者の振り返りと気づき

虫かごを人数分用意したことで、これまで虫に対して興味を示さなかった子どもも、園庭で見つけた花などを作るようになった。虫かごを大事にする様子も見られ、自分のロッカーに入れておくようにすると、いつでも出し入れして遊んでいた。いろいろな虫を作って入れたり、虫の住む環境を図鑑で見たりして、したい時にできる状態を整備しておくようにした。子どもの活動を予測して教材の準備や環境を整理することが必要であると感じた。

活動「カナヘビの家づくり」 4歳児



活動内容

捕まえたカナヘビを飼育するために、どのようなことが必要かを考え、飼育ケースの中の環境作りを行った。「カナヘビのお家」といって共通の目的をもって活動を行った。

活動のねらい

知識と経験を合わせながら、聞いたことや教えてもらったことを道具や材料を使って試してみる。

用意した環境

- 凶鑑・葉・土・木の枝・水
- 飼育ケース・飼育ケースの収納場所と観察場所



子ども達の様子

捕まえた3匹のカナヘビを同じ飼育ケースで飼育していた。5歳児の子どもからカナヘビは共食いすることを聞き「一匹ずつにしよう」ということになった。5歳児から得た知識や経験をよく理解して、どのようにしたらよいかを考えていた。家作りの場面では「カナヘビを捕まえた場所の土を入れたらいいかもしれない」と言って園庭の土を飼育ケースに入れた。クラスのみんながみえる場所に飼育ケースを置きいつでも世話ができるようにした。

保育者の振り返りと気づき

同じ時期に5歳児がカナヘビを飼育していた。5歳児が調べたことや飼育していて気づいたことを、4歳児に伝承していた。4歳児が凶鑑で調べる子どもは少数であったため、年長児の言っていることを真剣に聞き入れ、同じようにカナヘビの飼育をしていた。年長児への憧れと尊敬の気持ちがあったのではないと思う。クラスの子どもが共有できるように、飼育ケースの場所を決めておくに興味なかった子どもも飼育ケースを覗くようになった。それを機会に保育者と一緒に虫を観察するようになり、興味がでてきたようだ。

活動「研究所をつくる」 5歳児

活動のねらい

友達と気持ちや場を共有しながら、虫の生態を観察したり飼育したりすることを楽しむ。



活動内容

クラスで飼育することになったカナヘビを見たり調べたりするために「研究所」と称して虫の家と研究所を作った。

用意した環境

○ホール
○飼育ケース・草・土・図鑑・制作道具・虫眼鏡・図鑑



子ども達の様子

捕まえた虫は飼育ケースに入れていた。カマキリ・カナヘビの飼育には広い環境が良いことを知り、大きな飼育ケースにカナヘビを引っ越しさせた。保育室では、みんなで飼育ケースを覗き込むとよく観察できないことに気づき、飼育する場所をホールに移動した。「研究所みたい」「ここを研究所にしよう」という発言により、研究所作りに発展した。飼育ケースがよく観察できる場所を作り、虫のお医者さんといって虫眼鏡で観察できる場所を作った。研究所の看板や飼育している虫を描き掲示した。「研究所」という同じイメージをもって活動していた。

保育者の振り返りと気づき

これまでは、虫を捕まえ飼育することが子ども達の共通した目的であった。飼育する虫が決まり、カマキリ・カナヘビが、今より快適に過ごせる環境を考えるようになったことで、観察や世話をしやすい場が必要であることに気付いていた。保育者は、子どもの考えている環境作りをより具体的に理解し、教材や道具を提示した。子どもがイメージしていることを理解することで、保育者の援助が具体的にできた。

活動「食べてるところを見てみたい」 5歳児



活動内容

カナヘビの餌を捕まえて食べさせてみる



活動のねらい

虫の生態を知るなかで、興味をもったことを調べたり、調べたことを試したりする

用意した環境

○園庭（花壇・裏庭・畑）
○虫眼鏡・図鑑・ダンゴムシ・クモ・バッタ・虫かご



子ども達の様子

図鑑で調べたり、餌になりそうなものを試したりしていると、カナヘビは生きた虫を食べることがわかった。「園庭にいる、いるかもしれない」と探した。「ダンゴムシは食べない」「バッタを食べる」「クモは食べるかな」と、知り得たことを試した。捕まえた虫を飼育ケースの中に入れてみると、バッタを食べる瞬間を見ることができた。「もっとバッタを捕まえよう」と園庭に虫を探しに行く子ども、保育室で飼育ケースをじっと見つめる子どもがいた。子どもの会話では「僕が捕まえてくるからね」「食べるところを一緒にみようね」と共有し、試していた。また、書画カメラを使って、餌を食べるところを見ることができた。食べる瞬間の様子と、カナヘビの動きの速さに驚いていた。

保育者の振り返りと気づき

虫探し、飼育、世話などの経験をしてきた。常に図鑑で調べたりや大人に聞いたりするなどして、気になったことや興味のあることを調べて解決するようになっていた。保育者は子どもの知りたいことは何なのかを理解することで、調べる方向性や試してみる方法を提案することができた。子どもの興味が増え、知りたいという意欲が強くなっていく姿を感じた。子どもには応答的にかかわるようにした。